

『塩沢昌先生：東大「ハチ公と上野英三郎博士」像』



講演の最後は、東京大学大学院農学生命科学研究科農地環境工学研究室、9代目教授の塩沢昌先生からのお話でした。農地環境工学研究室は上野英三郎博士が初代教授をされていた研究室です。また、塩沢先生はハチ公と上野博士の像を東大に作る会の事務局長をされておられます。会の活動についてはウェブサイト『[東大ハチ公物語～ハチ公と上野英三郎博士の像を東大に作る会～](#)』にてご覧いただくことができます。

ハチ公と上野英三郎博士像設立の経緯

「像を東大に作ることを着想したのは、哲学研究室の一ノ瀬正樹教授です。2011年秋のことでした。一ノ瀬先生は犬好きな方で、ご自身の哲学研究のひとつに人間と動物の関係というテーマをお持ちです。その分野の世界の研究者の方々はハチ公のことはよく知っているけれど、飼い主が東大の教授であったことは誰も知らない状況にあることがとても残念だと感じられていたそうです。ハチ公の没後88年にあたる年が2015年だったため、それに向けて東大に銅像を作ることを一ノ瀬先生が東大の執行部に提案されました。」

飼い主の上野博士は農学部の教授だったため、執行部の方から農学部に相談するようにとの流れで、上野博士の研究室でもある塩沢先生のところに話が舞い込んできたそうです。

「もちろん我々はそれを歓迎しまして、準備を開始することになりました。像のコンセプトを①ハチ公と上野博士の逸話を像の形にして、人と犬(動物)との間の敬愛、愛情を象徴する。②大学の外にも見せる親しみのある像として、東京大学の真の歴史を啓蒙し、文学的なステイタスを高め、東京大学の広報に資するものとする。として、2012年に趣意書を作成しました。」

会の会長は当時の農学部長の長澤寛道先生(その後、古谷研先生に交代)、ほかにも農学部のいろいろな分野の先生方が多くいらっしゃいます。[会のメンバー全員につきまして、詳しくはこちらからご覧ください。](#)

「上野英三郎先生は農業工学という分野を日本で初めて拓いた方です。とくに日本は水田農業が中心なので、灌漑や農地の整備などの基盤を作る技術や、労働生産性を高めていくためにはどうしたらよいか、というような研究が行われていました。海外では一般的に、このような研究は工学部に属しているものなのですが、日本でそれが農学部にあるのは、上野先生という傑出した研究者・教育者が農学部にはいたからにほかなりません。」

像の製作に向けて

実際に像を作り始めるまでに、寄附金集め、像のデザイン、彫刻家の選定が行われました。

「中でも、目標額を 1000 万円としていた寄附金を集めることが一番心配でしたが、事務局長を引き受けた以上覚悟を決めて取り組みました。像のデザインはコンセプトに沿って、ハチ公と上野先生の愛情関係を表現するというので、ハチ公と上野先生がじゃれ合っている姿にしようということになりました。像の形は彫刻家に任せるのではなく、我々で議論して細部にわたるまで決めたものです。」

実際に像をつくる彫刻家の選定にも悩まれたそうです。

「ハチ公像はすでに世の中にいくつもありますが、最初はそれらハチ公の銅像を作った実績のある人の中から選ぶとしました。しかし、高齢すぎたり、ハチ公像そのものがいまひとつだったりと適当な人がいなかったため、新たに彫刻家を探すためにインターネットで調べたり、実際に日展へ彫刻を見に行ったりしました。それで分かったのですが、日本の彫刻は人物像がほとんどで、しかも裸婦像ばかりだということです。動物を作っている人がとにかく非常に少ないのです。」

そんな中、日展で入選していた牛と少年の像が塩沢先生の目に留まります。

「早速その作品の彫刻家である植田努さんに連絡をして話をしてみると、彼も是非作りたいということでした。最初に我々のデザイン案で模型を作っていただけ、人も犬もよくできているということで、植田さんをお願いすることに決めました。植田さんが紀州犬を飼われているというのも決め手になりました。しかし、像のデザインは変更することになったのです。」

当初、一ノ瀬先生は、ハチ公の目線と上野先生の目線が同じ高さになる方がいいと提案されていました。

「人が上から犬を見下ろさない方がいい、という理由からです。しかし実際模型を作ってみますと、上野先生が犬に襲われているようにも見えてしまうと。このような経緯があり、上野先生は立ち、ハチが先生にじゃれついているという構図にすることにしました。」

その後、像の作成準備として、中山裕之先生の知り合いの秋田犬ブリーダーの犬舎へ行きました。そこでは、実際の秋田犬を観察したり、植田さんが秋田犬と一緒に像のポーズをとって写真を撮るなどしたそうです。

「2014 年、銅像制作中の植田さんのアトリエに訪問しました。一ノ瀬先生などとともに、足が大きすぎるとか、毛のふさふさ感をもっと出して欲しいなど、細部にわたっていろいろな注文をしました。」

アトリエを訪問した同年、除幕式が行われる 1 年前の 2014 年 3 月 8 日に『東大ハチ公物語』というシンポジウムが開催されました。そこでの内容を中心に、さらにいくつか話を付け加えたものを『東大ハチ公物語(東京大学出版会)』という一冊の本に編集し、除幕式に合わせてその本は出版されました。

像の完成とその後

「東京大学のキャンパスには、野外に設置されている像が 20 体ほどあります。いずれも明治・大正時代に、その研究分

野を作った先生方で、研究・教育に貢献された先生方になります。それらの像と比べると、ハチ公と上野先生の像は、犬と一緒にという点ではほかに類を見ないものです。さらに、銘文が日本語と英語の両方で表記されているのもハチ公と上野先生の像だけになります。」

当初のデザインを変更して作られた像は、どのような場面をイメージしたものなのでしょうか。

「ハチ公は渋谷に通うのが習慣だったわけではありませんでした。普段、上野先生は大学へは徒歩で通っていましたので、渋谷駅に行くのは出張のときなど電車を使う場合だけでした。遺族の方への聞き取りで、ハチ公は上野先生の長期不在のあとには渋谷駅から帰ってくることを知っていたといっています。当時上野先生は 3 頭犬を飼っていたのですが、ハチ公だけが渋谷駅に迎えに来たことを大変に喜んでいたのでした。作った像は、久しぶりに渋谷駅に戻ってきた上野先生と、先生の帰りを待っていたハチ公が、再会を喜んでじゃれ合っているという場面をイメージしたものです。」

このような再会の場面はハチ公の脳裏に焼き付いていただろうと塩沢先生はいいます。

「決してハチ公は、上野先生が亡くなったことを知らなかったとは思いません。人間の死を犬は理解できないでしょうが、異変が起こったことは分かっていたはずで、上野先生が亡くなった日から、ハチ公は、上野先生の最後の着衣を入れた物置にこもり、3 日間飲み食いをしなかったというエピソードが文献にあります。」

上野博士の死後、ハチ公はすぐに渋谷に通い始めたわけではありませんでした。親族の家を転々とした後に世田谷に移った 3 年後からのことだそうです。

「渋谷に行けば、もしかしたら上野先生に会えるかもしれないとハチ公は期待していたのかもしれないとも思います。」

東大にハチ公と上野博士の像が完成したのち、アメリカのニュージャージー州にある **Abbey Glen Pet Memorial Park** のオーナーからある申し入れを受けることになりました。

「東大のハチ公像の存在をインターネットで知り、是非とも複製をつくりたいとのことでした。像というものは唯一であることに価値があるのですが、アメリカから東大まで見に来ることはなかなか難しいですから、アメリカという離れた場所に作るならば、ということで複製を認めました。」

東大に像がつくられてから 1 年半後の 2016 年 10 月、Abbey Glen Pet Memorial Park で複製像の除幕式が行われました。

「また、トリップアドバイザーという世界最大の旅行サイトがあるのですが、そこでハチ公と上野博士の像へ Excellent の評価がたくさんついたようで、2017 年には Excellence 認証をいただきました。すでに観光名所のひとつになっているということですね。ハチ公と上野先生の像は、我々の予想以上に多方面で反響を呼んでいると思っています。」